

# 死に至る存在のケア

—ベナーの看護論を手がかりに—

小林優香（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：ベナー、ハイデガー、ケア、現象学

## 序論

現代では医療技術の発達が著しく、患者の疾患を根治する方法が次々と開発されている。このとき、往々にして患者の身体は機械のように扱われる。しかし人間は、心を持つのであり、決して単なる機械ではない。それゆえに治療をする際には、患者自身の心に寄り添うことが求められる。死ぬまでを病院で過ごす事になると思われる患者が、病院で治療を受けながら送る生活を、自分の人生の中でどのように位置付けるか——こうした問題について考える手助けをする必要があるだろう。それは医師ではなく、看護師のように、患者に多くの時間寄り添いコミュニケーションを取っている者の役割であると思われる。患者に対する看護師の姿勢をケア論として示す事で、抽象的にも思える精神的なケアを明確に提示することができるだろう。

そこで本稿では、患者が自分の病気を解釈することに、ケアする者がどのように関わるべきかを明確にすることを目的とする。

## 第1章 ケア論における現象学の登場

### 第一節 ケア論の歴史

Careという言葉の辞書で調べてみると、「気がかり、不安、心配、注意、用心、関心事、責任、世話、監督、保護、悲しみ」などの多くの意味がある。そのうち、気がかり、心配、不安、悲しみは、困難な状況にある人の状態のことを、心配や不安はある対象への関心のことを、そして責任、世話、監督、保護は、助けを求める人への関わり方を意味している。この中には、ケアを必要とする人と、ケアを提供する人の双方の意味が含まれている。この事からケアとは、する者とされる者の双方の関わりによって成り立つものであると言える。このような意味でのケアは、病気にかかった人と、その人に寄り添う看護師の関係に看られる。

看護師の歴史は、19世紀から始まる。それ以前は、看護というものが専門職として存在せず、シャーマニズムや宗教的な職業に就いている者や、一般の女性によって行われてきた。原始においては病気というものが痛みや苦しみといった“悩み”として捉えられていた。そして、その悩みのもとである痛みや苦しみと取り除くといった行為がケアの発生といえる。

1840年までは、ケアを行う専門職というものが存在しなかったが、その後ナイチンゲールの登場により、今ある「看護師」という、専門職としてのケアラーが確立された。

### 第二節 ケア論における現象学の種類

榊原によれば、ケア理論における現象学的なアプローチには二つの系統がある。一つ目は、「患者の病気体験ないしその意味をその人が体験しているがまま、ありのままに理解しようとするために現象学的還元の遂行や現象学的態度を求めるもの」である。この方法は、フッサールの現象学的認識論の精神を受け継いだものである。

二つ目のアプローチは、「病気を体験している患者やその家族、そして彼らにケアという仕方に関わる看護師の在り方を理解解釈するためにそもそも人間という存在がどのような在り方をしているかについて現象学に知見を求めるもの」である。このアプローチは、ハイデガーやメルロ＝ポンティの現象学的存在論の知見に基づいたものであると言える。彼らの現象学を基にした研究を行っている研究者にパトリシア・ベナーとルーベルがいる。

以上のように看護論には二系統あると考えられるのだが、本稿では、看護論における現象学の中でも、二つ目のアプローチとして挙げた、存在論的なものを取り上げる。なぜなら、学術的な理論を用いずに人間をそのまま見つめ直すというこのアプローチ特有の姿勢が、ケアする者がケアされる者を本当に解釈する事において重要であると思われるからである。

### 第三節 存在論的現象学とは

榊原(2008)は、二つの観点から存在論的な現象学を特徴づける。

第一の観点は、人間の世界に対する関係である。現象学的な意味での世界は、私達が文化の中に生まれつくことによって持つ関係性や実践、言語からなる意味のある統合体である。世界とは多くの実践の集まりなのであり、私たちはそれらの実践の意味や可知性を求める際に世界に依存する。そして世界は自己によって構成されるとともに自己を構成するものでもある。それは自己が世界のうちで立ち上げられ、世界によって具体的に形作られる事を意味する。

第二の観点は、世界の人間に対する関係である。世界の中心

で事物が意味や価値を持つのは人間に対してであり、人間とは事物の目的的存在だ、ということである。分かりやすく言うと、人間がいるから事物が意味を成すということである。現存在は常に事物を気に向け、それに煩わされながら、何らかの形で依存している。この関心を引くという事が、より思慮深く要求したり評価したりするための基盤となる。

## 第二章 ベナーにおける現象学的ケア論

### 第一節 現象学的人間観

ベナーの代表的な看護論に、五段階の習熟度レベルというものがある。初心者から達人までを五段階に分け、抽象的なマニュアルから自分の行為を導く「初心者」から、常に変わる状況に臨機応変に対応する技能知を持つ「達人」を最上位とした。

それでは、ベナーが示した「達人」とは、どのような姿であるのか。それは、体に根差した知性、背景的意味、関心、状況、時間性、という5つのポイントから成っている。体で覚えた実践を用いて、患者に関心を持ち、彼らのおかれている状況に潜む背景的意味を、時間性に沿って解釈するといったケアの仕方である。

### 第二節 実践としてのケア論

ベナーは、自らの人間観にもとづく看護実践のあり方を提示している。それは、以下の8つにまとめられる。

1. ヒーリングの関係・癒しの環境をつくり、癒しのためのコミットメント（責任感を伴う深い関わり）を確立する。
2. 患者が疼痛や衰弱した時に安楽を与え、患者の人間性を守る。
3. 付き添い患者のそばにいる。
4. 回復に向かう過程で、患者自身の関与を最大限に引き出し、自律しているという自覚自信を与える。
5. 痛みの種類を見極め、疼痛管理とコントロールの適切な対応策を選択する。
6. 触れることによって安楽をもたらす、コミュニケーションを図る。
7. 患者の家族を、情緒面と情報面で援助する。
8. 情緒的な変化や情動的な変化に応じて患者を指導する。

こうした姿勢が実際に身についたかどうかは、看護師が、予測や予期ができると同時に想定外の業務に対応でき、さらに、個人的知識を持つと同時に看護師同士の共通認識や格率を理解できるようになったかどうかで判断される。

## 第三章 本当のケアとは

### 第一節 現象学的ケア論の中の誤解

一章で述べた現象学的なケア論や二章で述べたベナーによる人間観の中には、存在論的な人間観やハイデガーの思想を基にしたとされている人間観が登場する。しかし、これらのハイデガーの思想を基にした人間観というものは、ハイデガーの本意とは異なる形で展開されていることが多く、二章で

述べたベナーも例外ではない。その点について池田(2013)の議論を踏まえ論じる。

ベナーが基礎としているドレイファスのハイデガー解釈を、池田は不十分なものと見なす。というのも、ハイデガーの主張の核心は、『存在と時間』の後半部分にあるにもかかわらず、ドレイファスやベナーは、その箇所を完全に無視しているからである。池田が具体的な問題点として挙げるのは、ドレイファスの描き出す「熟達者」が、ハイデガーのものとは全く異なる点である。ドレイファスは、『存在と時間』前半におけるハイデガーやアリストテレスに依拠しながら、熟達者を「卓越者」「完成状態にある人」として描き出す。つまりドレイファスにとり、「さまざまな不運や苦境に対して耐性をもっている」ことこそ、人間の本来的な完成した姿なのである。これに対して、ハイデガーが示した人間の本来的な、あるいはケアする姿とは、「完成」ではない意味としての「終わり」へと向かう「死へと至る存在」である。

### 第二節 死にゆく人を本当にケアできる存在とは

池田は、ベナーがドレイファスの完全主義的な思想に影響されており、そしてハイデガーの核心を完全に無視している、と主張する。ベナーの看護論には、人間の本来的な姿とは完全なものである、というドレイファスの思想を取り込んだものがあるのだが、この点では、ハイデガーの本来的な姿とする、自らの非力さを受け入れる存在とは対極の考え方をしていると言えるかもしれない。

しかしこれらの池田の批判は果たして正しいものなのか。そこでベナーの看護論における人間観である「状況」という概念を用いる。この概念から、彼女がハイデガーの「人間は死に至る存在である」という考え方を理解しているという事が分かる。以上を踏まえると、彼女の提示するケアする者の人物像は、死に至る存在をケアする存在になりうるのではないだろうか。

### 結論

死というものは、生きている間は経験することができないため、死に至る人をケアするマニュアルがあったとしても、それが正しいものなのかを確認することはできない。しかし、ただそばに寄り添い、残りの時間を過ごすだけでも、ケアする者(看護師だけでなく親族も含む)にとってもケアされる者にとっても、死を解釈する為の重要な時となるのではないか。

### 主な参考文献

- 池川清子『看護-生きられる世界の実践知-』ゆみる出版、2003、206頁
- 榊原哲也「看護ケア理論における現象学的アプローチ-その概観と批判的コメント-」2008、pp97-109
- パトリシア・ベナー『ベナー看護論』医学書院、2005。
- 池田喬「死に至る存在としての人間-ハイデガーとケア-」『明治大学教養論集』2013、pp145-167
- ハイデガー、原佑訳『存在と時間III』中央公論新社、2003